

# 「感性」を理解するためには（10ヶ条）

(sensitivities, sensibilities, emotions, impressions, feelings...)

●リーダーシップと感性が求めていることは同じー（努力、感謝、思いやり、誠実、謙虚）等、当たり前を受け止め、（感性・創造性→倫理・哲学）にできる力を身に付けていること。

## I. 「感性への入口」 ー自己啓発（自分で考える）

1. 身の丈の合った感性。  
ー感性の入口とは（心の結びつき、思いやり（包容力）、感謝（有難う）、情熱、透明性、誠実、躰）等。
2. 教養が感性を拓け、深める。  
ー教養とは（日本文化、日本の歴史、趣味・興味から生まれる学識の広がり）等。
3. 感性を身に付けるためには創造性は不可欠。  
ー自分の身の回りに関心を持ち、何故と考える。→自分なりの答え（個性的）→独創性→創造性。  
感性を身に付け、より高みに到達するためには独創性・創造性が必要。
4. 自分なりの感性を創る。ー感性とは何かを考えてみる。

## II. 人間性の啓発 ー感性の持つ暖かみ

5. 人間性が感性を深める、拓ける。人間性（生まれてからの歴史、両親の温かみ、徳育、知性）。
6. 他人の感性に触れる。→互いの感動が理解できるか（長野県立こども病院＝死と背中合わせの感性）。
7. 身についた感性を使っているか。ーより高みの感性を身に付ける努力をしているか。
8. 感性を維持する努力をしているか。  
ー感性が身についたか(感性を磨く、人の温かみとは何かをいつも考えているか。)

## III. 感性と科学・倫理 ーもっとすばらしい人間となるために

9. (個性→独創性→創造性)のプロセスから生まれる人間性。→倫理・哲学の連環を感性として向上に生かしているか。
10. 感性を科学するには。
  - ・「感性とは」という自分なりの答え（神頼み？）を感性として受けとめられるか。
  - ・感性を学問（科学）として身に付けることは、
    - ①感性を学問にできるか。
    - ②感性に基づく学術的コミュニケーションは可能か。
    - ③感性から生まれる価値をマネジメントするには。⇒新しい感性価値の創造と波及。  
ーよりよい生活のために感性が使えるか、等統一した新しい学問領域を創ること。